

niponica

Discovering
Japan

にほにか

no. 36



● 特集 ●

日本で「書く」を究める



niponica

にぽにか^{no.} 36

● 特集 ●

日本で「書く」を究める

デジタル化・ペーパーレス化が進む現代においても、
「書く」を究めようとする日本人の情熱が衰えることはない。
その愛情が生み出した、果てしない文具の世界。



上／掲載した文具の詳細は4～7頁にて
表紙／500色鉛筆（写真＝フェリシモ）

contents

- 04 日本で進化した文具の歴史
- 08 日本の文具は、
なぜ進化し続けるのか
- 10 書きに行きたくなる場所
- 12 色を遊びつくす
- 14 マンガ家の愛用道具
- 16 につぼん地図めぐり
ご当地文具
- 18 召し上がれ、日本
組み飴
- 20 街歩きにつぼん
越前
- 24 ニッポンみやげ
メモ

日本語で「日本」を表す時の音「につぼん (nippon)」をもとに名づけられた「にっぽにか (nipponica)」は、現代日本の社会、文化を広く世界に紹介するカルチャー・マガジンです。日本語版の他に、英語、スペイン語、フランス語、中国語、ロシア語、アラビア語の全7カ国語版で刊行されています。

no.36 R-060426

発行／日本国外務省
〒100-8919 東京都千代田区霞が関2-2-1
<https://www.mofa.go.jp/>

日本で進化した文具の歴史

多種多様なペンにノートやえんぴつ、万年筆……。

「書く」を究めようとするメーカーや職人たちの探求によって生み出され、
進化し、世界標準となった文具たち。



ボールペン



水性ボールペン

1964年、オートが世界初の水性ボールペン「W」を発売すると、油性ボールペンにない滑らかな書き心地が国内外で評判となった。最新作「CR01」は独自設計により、キャップがなくてもペン先が乾かない（写真＝オート）

世界初の水性ボールペン「W」



ボールサイン

世界で初めてボールペンに水性顔料ゲルインクを使用。水性インクにゲル化剤を加え、スムーズな書き味と、耐水性・耐光性を両立させた。沈殿しないゼリー状のインクには種々の顔料が使えるようになり、ボールペンの多色化を進めた（写真＝サクラクレパス）

フリクションボールノック

文具界に大きな変革をもたらした、消せるボールペン。ペンについた専用ラバーでこすると、摩擦熱に反応して筆跡が透明化するという画期的なしくみ（写真＝パイロットコーポレーション）



消す

書く

ジェットストリーム スタンダード

超低粘度油性インクを搭載することで、摩擦が減り、なめらかな書き心地と濃い描線を実現。2006年の発売開始以降、低粘度油性ボールペンの世界的ブームを牽引（写真＝三菱鉛筆）



従来の油性インク

~~~~~

ジェットストリームインク

~~~~~

シャープペンシル



クルトガ

書くたびに芯が回転して均一に摩耗するため、細く書き続けられるシャープペンシル。2008年の発売以降、シリーズ累計販売本数1億本を突破（写真＝三菱鉛筆）

ハイポリマー芯

合成樹脂に熱を加えると炭化し黒鉛となじんで固くなる性質を活かすことで筆圧に耐える細い芯が実現し、1960年に0.9mm、62年に0.7mmと0.5mmを発売。（写真＝ぺんてる）



サインペン・筆ペン



サインペン

1963年に世界初の中綿式水性ペンとして誕生。アクリル繊維を使ったペン先が、ペンと筆のよさを兼ね備えた書き味を実現。当時、ジョンソン大統領の手に渡って全米で話題となり、NASAの宇宙船に持ち込まれた。世界中で愛用される水性ペンのベストセラー（写真＝ぺんてる）

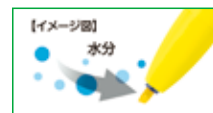
アートブラッシュ

日本では、贈答品に名入れをしたり手紙を書いたりする時に毛筆をよく使うが、1970年代、ペンのように手軽に筆文字を綴れる筆ペンの登場は画期的だった。現在は多色化が進み、海外ではアート用の筆としても人気。カラーラインナップは全24色。色を混ぜれば表現の幅も広がる（写真＝ぺんてる）



マークタス

先端を回転させ、1本で2色を使い分けられるペン。強調したい部分や完了したタスクを色別にマークし、スケジュール管理に役立てたりするのに便利（写真＝コクヨ）



クリックブライト

吸湿性の高い成分を配合したインクが空気中の水分を集めるから、キャップがなくてもインクが乾かない、ノック式蛍光ペン（写真＝ゼブラ）



蒔絵の技法を施した万年筆。100年の時を経て受け継がれる（写真＝パイロットコーポレーション）



長刀研ぎ万年筆

日本の多くの文具メーカーは万年筆のオリジナルペン先をつくる技術を持つ。セーラー万年筆の長刀研ぎもそのひとつで、ペン先の端に通常より大きいペンポイントをつけ、長刀の刃のように長く、滑らかな角度に研ぎ出す。それにより、ペンを寝かせると太く、立てると細く書け、漢字の線を美しく筆記できる（写真＝セーラー万年筆）



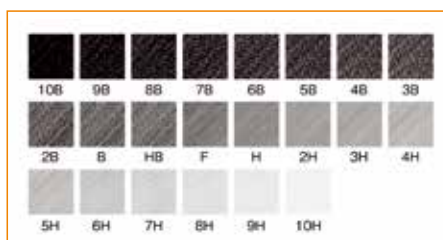
1925年当時の蒔絵万年筆

カスタムURUSHI

およそ100年前に、エボナイトに漆を塗った万年筆が誕生。1925年には、そこに金粉などで絵を描く蒔絵の万年筆（左）を発売した。近年は、蒔絵万年筆だけでなく赤と黒の漆を塗り重ねて鏡面のような艶をまとうせた最高級モデルも人気（上。写真＝パイロットコーポレーション）

ホクサイン

特殊製法の芯は一般的な鉛筆の約2倍の強度があり、3Bや4Bといった濃い芯でも強い筆圧で書ける。黒鉛が飛び散らず手が汚れにくいのでデッサンや絵画に最適。軸の色は浮世絵師・葛飾北斎をイメージした「北斎ブルー」(写真=クツワ)

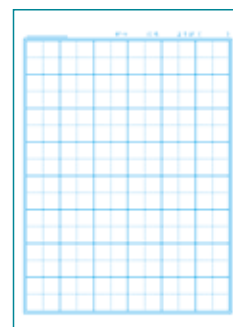
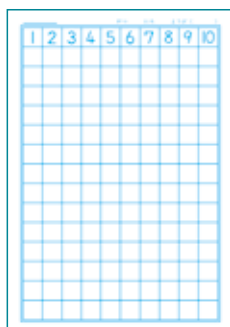


ハイユニ アートセット

10Hから10Bまで、全22硬度の書き味を楽しめる鉛筆セット。不純物の少ない黒鉛と粘土を均一に混ぜた芯の書き味は、濃くなめらか。デッサンなどの画材として定評がある(写真=三菱鉛筆)

ジャポニカ学習帳

1970年の発売以来、日本の子どもたちに愛されてきた。学年や教科によって、また作文や漢字練習といった用途によって、方眼や罫線の種類とサイズが細分化された約50種が揃う(写真=ショウワノート)



キャンパスノート

学生をはじめ広い世代にファンが多いノートの定番。罫は方眼罫や縦罫、ドット入りなど用途で細分化され、罫線の幅にも5～10mmのサイズ展開がある。中紙に管理された森林のパルプでつくった「森林認証紙」を使うなど環境への配慮も(写真=コクヨ)

日本の文具は、なぜ進化し続けるのか

高度に練り上げられた機能と、
無数のバリエーションを持つ商品が尽きることなく生み出される。
日本の文具の世界は、どうしてこんなに豊かなのだろう。
専門家の解説とともに、日本で進化した文具の変遷をたどる。

談話。高畑正幸



かるた 読み札と絵札を使って
遊ぶカードゲーム
「歌かるた」 ColBase



日本は文具大国と称されるが、確かに、2000年代以降、新たに発明された文具のほとんどは日本生まれといっている。その筆頭が、消せるボールペン「フリクション」*¹や超低粘度ボールペン「ジェットストリーム」*²だ。

日本の文具は、品質、機能性、デザイン性を兼ね備え、遊び心もあると評価が高い。中でも特筆すべきは、先述の最新技術を盛り込んだ筆記具が数百円という安さで買えることである。すでに完成したと思われるものについても、わずかな不便さに着目して改良を続ける姿勢は諸外国と比べると特異にみえるかもしれない。

文具の国は、紙の国

日本人と文具の関係を考える時、日本が古来「紙」に恵まれた国だったことは重要である。現在のような、ほぐした植物繊維を漉いてつくる紙の製法は前2世紀頃に中国で発明され、製法が日本に伝搬したのは7世紀頃。シルクロードを経てヨーロッパに伝わったのが13世紀あたりだから、日本は紙の先進国だったといえる。国土の約7割が森林で川も多く、原料となる植物や水が豊富。そのため文字を記すだけでなく、工芸品や家具、衣類にまで紙が使われた。全国で手漉き和紙がつくられ、すでに8世紀頃からどの産地の和紙が何の用途に適するかを論じた。正倉院*³には当時の和紙が保管され、天皇の妻が、その中から何色の和紙を用いるか選んだと伝わる。愛用の「紙」を厳選する行為を、日本人は1300年も前から行っていたのだ。

いっぽう、紙の資源が豊かでない国では、その貴重さゆえに「紙に文字を書く」行為は長らく貴族や上流階級の特権とされた。もちろん、日本でも紙が使われ始めた当初は、公家や幕府など特権階級のものだったが、庶民にも比較的早く広まった。江戸時代(1603~1868)に



浮世絵 江戸期に発達した多色刷の版画。絵のなかに文字が書かれるものも多い
歌川広重「御殿山花見 見立花の宴」国立国会図書館蔵



瓦版 街頭で巷の出来事を伝えた、木版の刷り物。図は、19世紀の江戸での地震の被害を伝えたもの（写真＝アフロ）

千代紙 模様を色刷りした和紙。手芸などに使われた（撮影＝栗原 諭）



はかるた、浮世絵や瓦版、千代紙が普及し、庶民の娯楽に紙や絵、文字が多用された。文具は庶民の道具という価値観は、この頃から育まれたのだろう。19世紀には墨と筆と和紙の世界に万年筆やインク、機械製造の洋紙といった西洋の文具がもたらされ、日本人はその技術に倣い、改良を加えていく。

そして現在、日本では紙に特化した展示販売会「紙博」が各地で開かれ、2023年12月開催の「文具女子博」には4万5000人が来場するなど、大きな賑わいをみせている。文具メーカーは毎年のように新商品を発表し、ユーザーもまた、その繊細な書き心地や使い勝手の進化を敏感に感じ取って評価するという、幸福な関係が築かれている。

書き文字に思いを込める

誰もがスマートフォンを持ちペーパーレス化が進む時代に、なぜ日本人はこれほど文具を愛するのか。その理由のひとつとして、日本人が、文字から感情を汲むことに長けていた点が挙げられるのではなかろうか。手書きの文字には人となりあらわれ、その文字を丁寧に書いたのか、急いで書いたのかまで伝わってしまうもの。とりわけ、日本人は、漢字、ひらがな、カタカナという3種の文字を併用する特殊な表記体系を持ち、同じ言葉でもどの種類の文字を選択するかでニュアンスの違いを表現する稀有な感覚を持つ。だからこそ、書くという行為に情報伝搬だけではなく創造性を求めようとするのだろう。

日本人の文具への愛着と技術者の飽くなき探求心は、長きに渡って脈々と受け継がれてきたものであり、その思いを礎に、日本の文具は進化を続ける。



文具女子博 筆記具からシールまでさまざまな文具が出展される（写真＝文具女子博実行委員会）

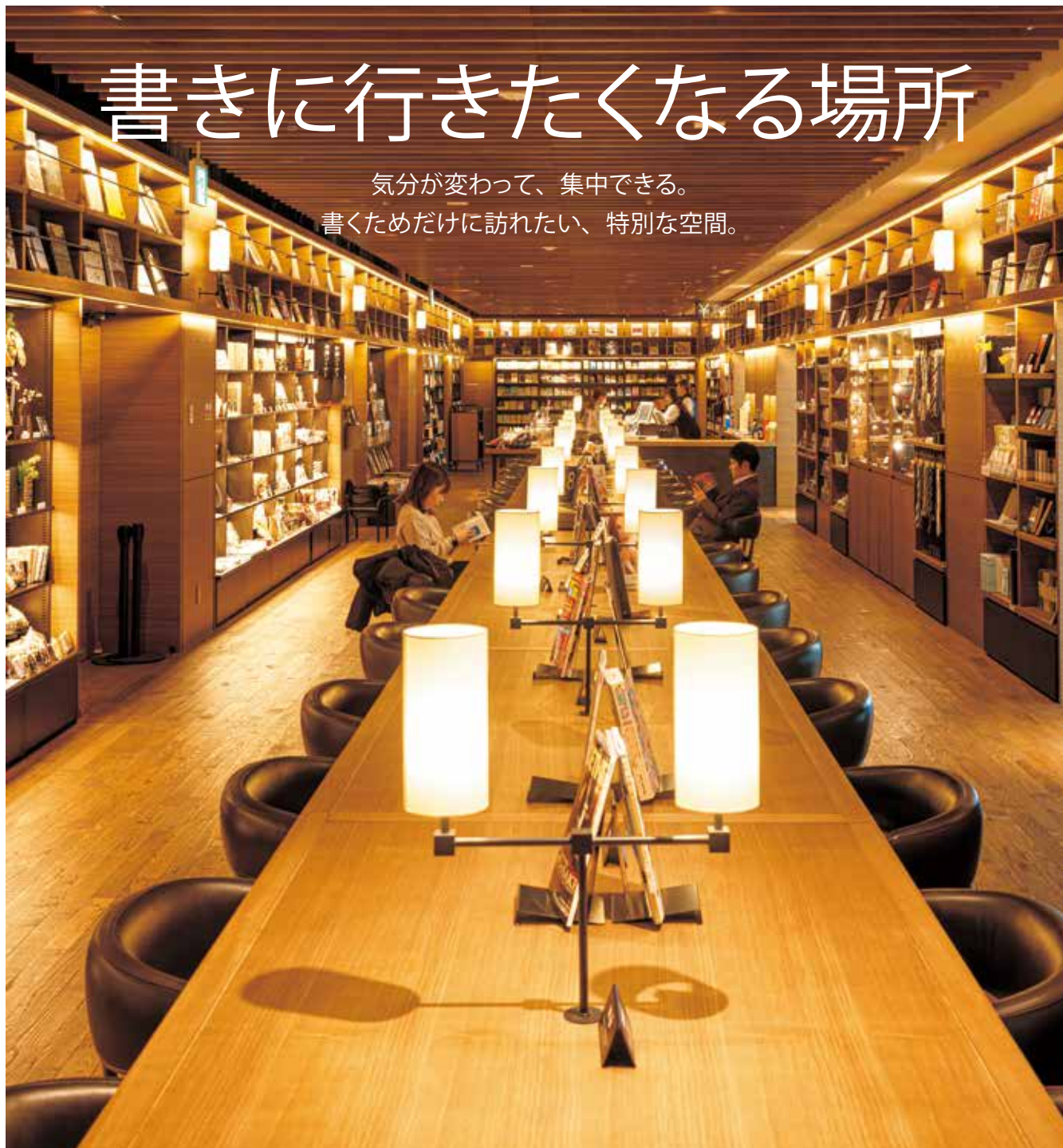
- *1 4頁参照
- *2 4頁参照
- *3 奈良市の東大寺にある、皇室の宝物を収納した倉庫



高畑正幸（たかばたけ・まさゆき）
1974年香川県生まれ。テレビの人気番組『TVチャンピオン』全国文房具通選手権に出場、3回連続で優勝し「文具王」と呼ばれる。文具メーカーのサンスター文具にて13年間、商品企画・マーケターを経て退職後、同社とプロ契約。文房具の情報サイト「文具のとびら」の編集長を務め、個人でもYouTuberとして文具情報を発信中。

書きに行きたくなる場所

気分が変わって、集中できる。
書くためだけに訪れたい、特別な空間。



出立の前のひと時を過ごす、 書店の長テーブル

慌ただしい空港の中であって、静かで落ち着いた空間が広がる「羽田空港 蔦屋書店」。日本文化を紹介する書籍から小説や漫画まで、幅広いラインナップが揃う店内の本を、中央に置かれた長テーブルでゆっくりと読むことができる。この長テーブルは自由に使えるので、飛行機の出発までの時間、手帳を開いてスケジュールを整理したり、アイデアをまとめたりするために利用するビジネスパーソンが多い。併設するカフェの飲み物も持ち込みが可能。喧騒を離れてリラックスしながら手を動かせる贅沢な空間だ。



上／書棚に囲まれた長テーブル 下／外の様子を眺めながら、書き物に興じる
(写真＝栗原 諭)

手紙専用の机がある 雑貨店

ゆっくりと手紙を書きたければ、文具や絵本を扱う大阪の雑貨店「ポスト舎」を訪れたい。個性豊かな便箋や封筒がそれぞれ約30種類も揃い、購入すれば、つけペンの一種であるガラスペンとインクを借りることができる。窓際の一角にある使い込まれた木製の机に座って、公園の木々や街並みを眺めながらペンを走らせれば、おのずと気持ちが手紙に乗り移るだろう。



上／雑貨店の奥に置かれた机で、手紙をしたためる 左下／包装紙などを加工したオリジナルの便箋 右下／お店で購入できるガラスペン
(写真＝山口真一)



誰でも作家気分が 味わえる旅館

日本では、執筆に行き詰まった作家が旅館やホテルに部屋を借りて執筆に集中することを「カンヅメ」と呼ぶ。東京にある「鳳明館」は、そんなカンヅメが体験ができるユニークな旅館だ。過去には本物の作家が使ったという本館には、簡素で趣のある和室があり、木の文机に原稿用紙を広げれば気分は文豪まがいなした。



左／作家になった気分で原稿用紙にペンを走らせる
右／1898年に建造された鳳明館本館
(写真＝栗原 諭)

色を遊びつくす



文具店「カキモリ」2階にあるインクスタンド。
スタッフが丁寧に対応する

世界にひとつだけの色をつくる

東京の観光名所・浅草に近い蔵前。このエリアにオーダーメイド専用の「インクスタンド」を持つ文具店がある。

14色のオリジナルインクと赤・青・黒、そして薄め液の計18種から選び、スポイトで1滴ずつビーカーに落として混ぜる。この時、どのインクを何滴入れたかを記録する。その配合通りにスタッフがインクを調合し、最後に店特製のインク瓶に詰めてくれる。以前、この文具店で調合したインクを発売した時、客から「この色とこの色の中間の色が欲しい」「もっとたくさん色があつたらいいのに」との声が多数あり、スタンドをつくった。

当初は、水溶性で紙によく浸透する染料インクを使っていたが、にじみやすく、すぐに色褪せしてしまうのが難点だった。そこでインクメーカーに特注し、筆記具であまり一般的ではなかった顔料インクを独自開発。鮮明な色が長持ちしてペン先に詰まりにくい最適なインクができた。

混ぜるインクの色数は原則3種類に限っている。それ以上は黒く濁るだけだからという。色に蛍光がかった鮮やかさを加えたければ、薄め液を足す。色調や濃淡を試行錯誤しながら調合した結果、市販品にはない絶妙なニュアンスが生まれ、世界にひとつだけの色が完成する。旅の思い出になると評判を呼び、今や世界中からファンが訪れる文具の名所となった。



上・下／つけペンで試し書きして色を確認しながら調合する 右／自分だけのオリジナルのインクが完成

自分だけの色がつくれるラボ、子どもも大人もはまる、色とりどりのオイルパステル。
描くことへの飽くなき探究が生んだ、日本人の色への情熱を見よ。

写真・新居明子

色を描いて学ぶ オイルパステル

日本の幼児が絵を描く時に最もよく使われるとあっていいほどポピュラーな画材が、オイルパステルだ。中でも、大阪の老舗画材メーカーが開発したオイルパステルは、100年以上にわたって、定番商品として愛され続けている。人気の秘訣は、硬さがあってべたつかず扱いやすいクレヨンと、伸びがよく自由に混色できて面もぬりやすいパステルの、両方の特性をあわせ持っているところだ。

材料は顔料と蠟と液体油。蠟を溶かし顔料を混ぜて液体油を加えて練り、棒状の型に流して冷やし固める。創業90周年を迎えた2011年には、記念に700色のオイルパステルを企画。開発に際しては、同社研究所に属する「色の職人」らが、隣り合う色のグラデーション幅を均一にすることに留意しつつ、まず約2100色を作成。約2100色ともなると、色の違いが肉眼で判別しづかったため、3分の1に絞って配色した。

また、子ども向けの商品には、色彩教育のため、自然に由来する日本の伝統色の名前をつけるようにしている。たとえば、鮮やかな黄赤は、柑橘の果物の「だいたい色」。くすんだ赤みがかった黄色には、秋の落ち葉に似た「朽葉色」に。日本の子どもたちは、色を通して、無意識に文化を体感しながら育っていくのだろう。



上／原料となる顔料。天然と合成、どちらの由来もある 下／工場で、型に流し込んだ材料の溢れた部分を削って成形するようす。削った部分も再利用する(写真＝サクラクレパス)



左／サクラクレパス社のオイルパステル商品「クレパス®」。商品名は、クレヨンとパステルの特徴を兼ね備えることに由来 右／アクリルのケースに納められた700色のクレパス®。微妙な色の差は、研究員が一つひとつ目で確認して顔料を配合し実現した(写真＝サクラクレパス)



鉛筆で下書きをするマンガ家の田中てこさん。文具とデジタル機器を組み合わせでマンガを描く

マンガ家の愛用道具

日本のマンガは、どんな道具から生み出されているのだろう。
プロの愛用道具と制作過程から見てみよう。

写真。栗原 論 協力。ワコム

世界中に読者がいる日本のマンガ。近年は、その描き手である作家の過半数が、デジタル機器だけで作品を描いているといわれる。そのいっぽうで、昔ながらに下書きから仕上げまでの全工程をペンと紙、インクで描き上げる紙に書く派も健在で、さらには文具とデジタル機器を組み合わせるハイブリッド派も少なからず存在する。

昔も今も、日本のマンガ家が愛用する道具といえば、ペン軸にペン先を挿して描く「つけペン」だ。鉛筆などの下書きをインクでなぞる本番作業「ペン入れ」の際に欠かせない。中でも「Gペン」という名のペン先は、割れ目が深くて開きやすく、筆圧の加減で線の太さを調節できるため、キャラクターの主線（輪郭）に使われることが多い。また、瞳や毛髪、背景といった細く精巧な線を描く用途には「丸ペン」というペン先が適するとされる。いずれにせよ、キャラクターに魂を込めるには手書

きでなければならない作家たちは、アナログな文具にこだわり、自分の好みに合ったペン先やペン軸、鉛筆、インクを厳選して使っている。

パソコンにつないだ液晶画面に、デジタルペンで直接描ける「液晶ペンタブレット」の登場は、マンガ表現に新しい道を拓いた。紙とペンのような感覚で線を引いたり色を塗ったりすることが可能で、ペンは筆圧も感知する。色は何億通りもある表示色から選び放題で、写真を取りこんだり地紋をつけたりといった背景の加工も瞬時にできる。

物語のプロット作成に始まり仕上げに至るまで、マンガをつくりあげる作業は、並大抵のことではない。文具とデジタル機器、それぞれの利点を活かしながら、これからも日本のマンガは発展しつづけていくだろう。



1



4

田中てこさんがカラー絵を描く手順を追ってみよう。印刷した際に写らないよう、青い芯（1）のシャープペンシル（2）で下絵を描き、さらに鉛筆（3）でなぞる（4）



2



3



5



6



8



7



主線を描く「ペン入れ」の工程。Gペン（5）と丸ペン（6）のペン先をペン軸に挿し込み、インク（7）をつけて輪郭を描く（8）。ペン先は表現したい線の太さによって使い分ける。手書きはやり直しがきかないので緊張の一瞬



色塗りは液晶ペンタブレット（9）で行う。手書きでペン入れした画像をスキャナで読み込み、デジタルペンで着色（10）。色はカラーパレットから自由選べて、ブラシツールで「ぼかし」などの効果を加えるのも簡単（11）



9



10



11



鮮やかなカラー絵が完成

手書きとデジタル、それぞれのよさ

デジタルデータは共有が簡単ですし、失敗してもやり直せる安心感があります。片や手書きはやり直しがきかないぶん、線に緊張感と迫力が出るように思います。どちらの道具にせよ、使いこなせるようになるには、とにかくたくさん描くことが大事です。

（お話を聞いた人
漫画家・田中てこさん）



田中てこさんの作品
『放課後×ボニーテール』（マーガレットコミックス、集英社）





にっぽん
地図めぐり

ご当地文具

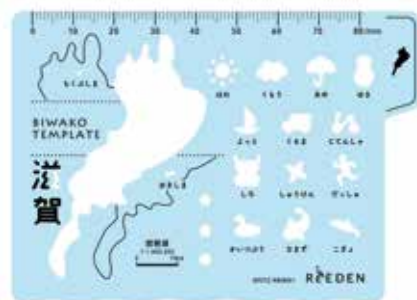
工芸品として古くから土地に受け継がれてきたもの、
名産品や景勝地をイメージしてデザインされたもの。
地域ならではの特徴を色濃く映した
文具に誘われる、誌上旅行へようこそ。



滋賀

琵琶湖を 描く定規

日本最大の湖・琵琶湖が、約
100万分の1縮尺で描ける定規。
湖に生息する生き物や周辺の観
光スポットである城などのシル
エットもあり、旅の記録を楽し
くつけるのに役立つ
(写真=コクヨ工業 滋賀「びわ
こテンプレート」)



広島

毛筆

人口の約1割が筆作りに携わる筆の町・広島県熊野
町の筆は、職人が手作りするその毛先が繊細で、正
確な線や細部を自在に描けると評判が高い。文具と
してのみならず、その技術を活かした化粧筆は海外
でも人気 (写真=筆の里工房)



長崎

ご当地インク

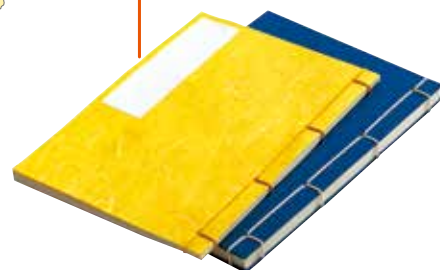
長崎県の名産や景色をイメージ
した色とりどりのインクはお土
産としても最適。写真は、濃い
緑と水面の対称が見事な九十九
島の景色を表現したインク
(写真=石丸文行堂 長崎美景
インク「九十九島アイランドグ
リーン」)



高知

和綴じノート

一針一針、糸がかがって綴じる伝統
的製法で作られたノート。見た目に
美しいだけでなく、化学のりを使わ
ないため経年劣化もしにくい。土佐
和紙の産地に残る貴重な製本技術
(写真=高知製本)



石川

金箔を貼った万年筆

石川県金沢市の金箔工芸と国内屈指の万年筆ブランドがコラボレーション。金箔などで花鳥風月を描く技法が活きる
(写真＝箔一、プラチナ万年筆「金沢箔万年筆」)



青森

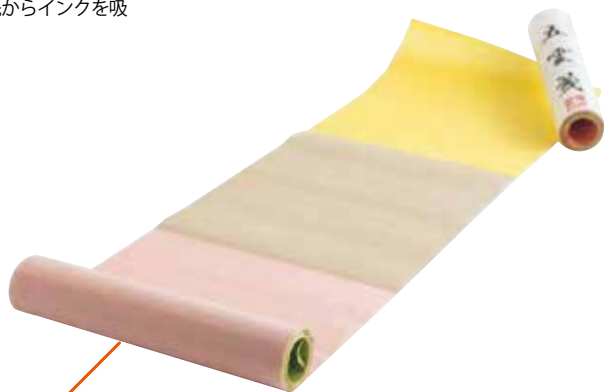
りんごのインク壺と ガラスペン

青森県の名物、リンゴをかたどったインク壺(左)と、先端に小さなリンゴがついたガラスペン(右)。ガラスペンは、右側の透明なペン先からインクを吸い上げて書く日本発祥の筆記具
(写真＝津軽ひいどろ)

東京

巻紙

古来、日本では手紙や文書は和紙の巻紙に毛筆で書かれることが多かった。写真は、五色の和紙を貼り合わせたもので、ペンでもにじみにくい処理がしてある。200年以上、和紙と紙製品を商ってきた老舗の人気商品
(写真＝横原「五雲箋」)



京都

御朱印帳

日本の神社仏閣では、参拝の証に寺社名や日付を墨書した「御朱印」を授かれる。和紙を綴じた御朱印帳を備えたところも多く、これを持って何力所も巡る観光客も多い。写真は着物を模した御朱印帳
(写真＝谷口松雄堂)



奈良

墨のオブジェ

古代に都が置かれた奈良県は、古くから墨づくりの中心地だった。7世紀頃に流行した仮面舞踏劇のお面を模した優美な墨は、摺らずにとっておきたい
(写真＝錦光園「香り墨Asuka」)



組み飴

甘く小さな飴に
文字を乗せて

写真・栗原 論
協力・まいあめ



細長く引き伸ばした組み飴のパーツを組み上げ(上)、円筒状にまとめ(中)、2cmの細さに引き伸ばしていく(下) (写真提供=まいあめ)
左/「ありがとう」を表した日本語と英語の組み飴

組み飴とは、切っても切っても断面に同じ絵柄が出てくる飴のこと。人の顔や動物、花、果物などのモチーフが断面に描かれる。

日本では、古くは飴といえはうるち米や粟など穀類のでんぷんを麦芽で糖化させて作る液状の水飴を指し、これを練って固形の飴を作っていた。江戸時代(1603~1868)に入ると、砂糖が一般に流通するようになると、水飴に砂糖を加えた甘味の強い飴がつくられるようになり、菓子として庶民の間で親しまれるようになった。

組み飴が登場したのも江戸時代。水飴と砂糖をあわせて煮詰め、引き伸ばしては畳んで練り、色をつけ、細長いパーツをいくつかつくる。さらにそのパーツを組み合わせて直径

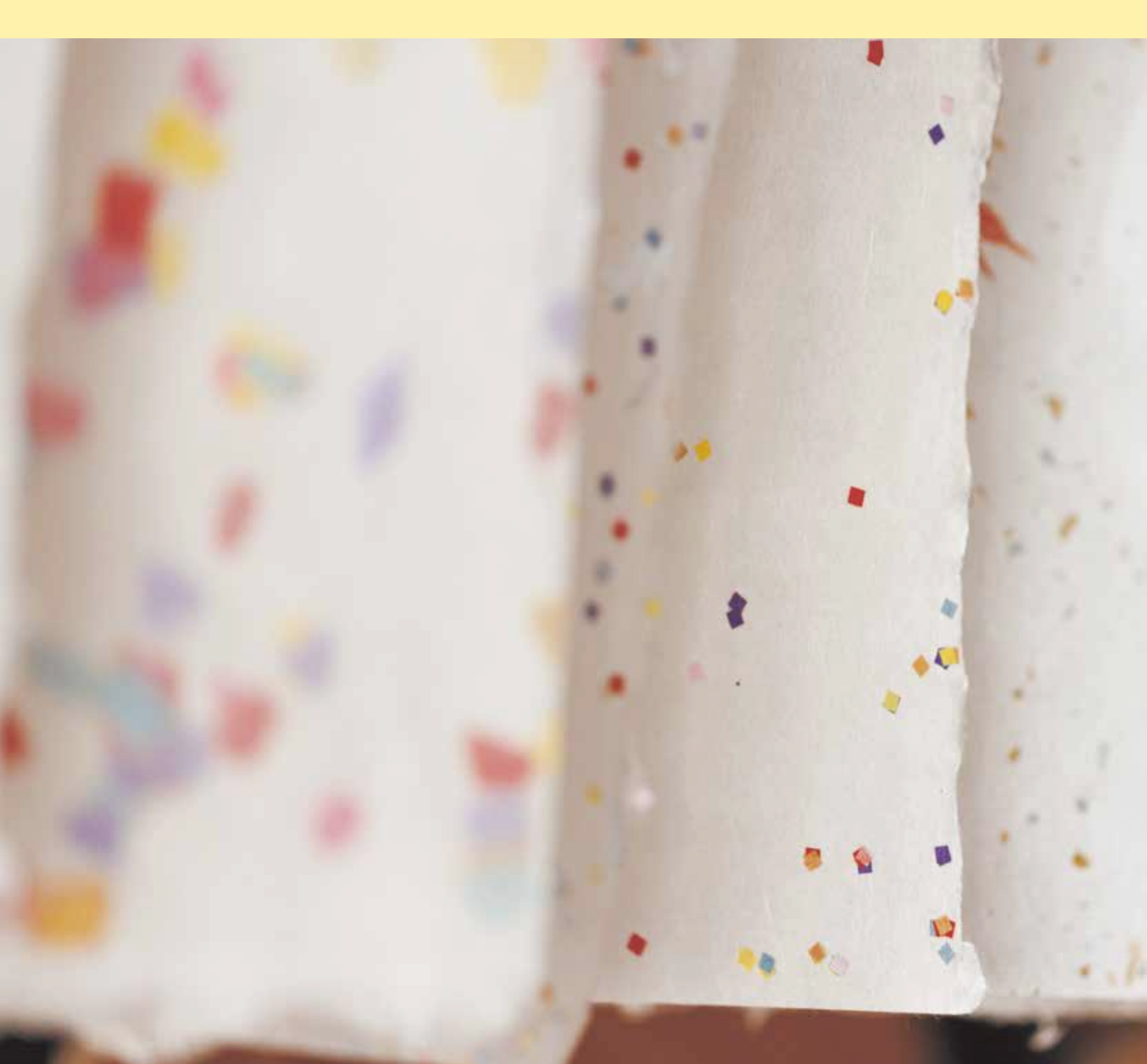
約30cmの円筒形にする。これを細く引き伸ばして切ると、断面から同じ絵柄が現れるというしくみだ。すべてのパーツを組み上げて引き伸ばすことができるのは、飴が温かく軟らかい30~40分の間。絵柄が潰れずに、かつ、きれいな円筒形が保たれるよう常に転がしながら手早く作業を続けなければならない。

絵柄だけでなく、文字を表現することも可能だ。愛知県の組み飴製造業者は、注文に応じたメッセージ入りの組み飴を手がけている。専門のデザイナーが色や組み方を細かく指示した仕様書によって、100近くのパーツを必要とする複雑な文字も表現できるそう。パーツが歪んだり、ずれたりしては文字が読めなくなっ

てしまうので、組み立てには細心の注意を払うという。意外にも、文字数や画数が少なすぎても、文字と余白のバランスがとりづらくなるため調整が難しい。完成形をイメージし、必要なパーツを手際よく組み立てるには、職人の経験と勘が物をいう。

このように、文字が書かれた飴は、気持ちを伝える手段のひとつになる。気軽に渡すことができ、励ましや優しさを、目に見える形で伝えてくれる。小さいけれど、一粒口に含めば、香りや甘さとともに、思いが身体奥までじんわりとしみわたっていくようだ。





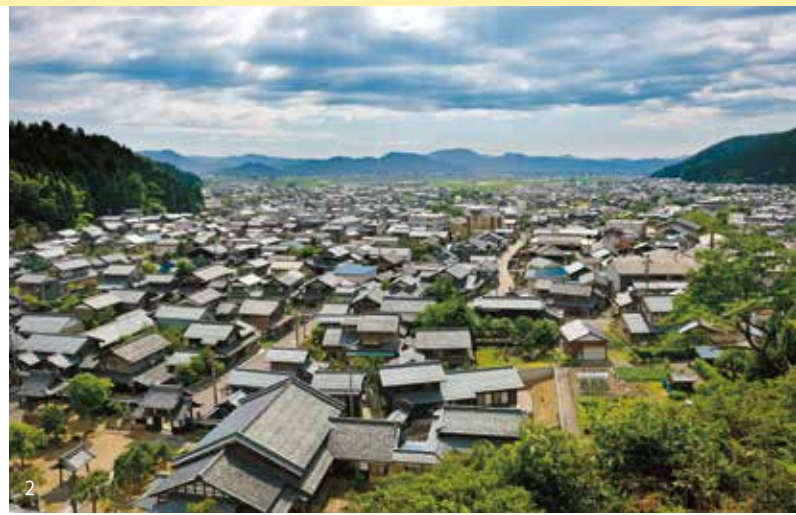
伝統の技を
今に伝える和紙の街

越前

日本有数の和紙の生産地、越前。
千年を超えて受け継がれる
手仕事の風景に会いに行く。

写真。栗原 論





1／模様がつけられた越前和紙
2／伝統的な建造物が並ぶ五箇地区
3,4／19世紀に建立された、岡太神社・大瀧神社の社殿。川上御前（写真左）を祀る



5／和紙の原料となる楮。木の幹から皮を剥がして用いる
6／「卯立の工芸館」では、昔ながらの木製の道具で紙漉きを行う
7／原料から塵や不良な繊維を丁寧に取り除くことで、白く美しい和紙となる





8



9



10

8/和紙づくりを体験できる「柳瀬良三製紙所」

9/漉いたばかりの和紙の上に金型を置き、水をかけて模様を浮かび上がらせる

10,11/色や模様を付けた和紙は、団扇形のしおり(11)などの小物にも使われる



11

東京駅から北陸新幹線に乗って約3時間。2024年春に開業した越前たけふ駅で降りると、福井県越前市にたどり着く。三方を山々に囲まれた盆地に広がるこの街は、かつて、地域の行政機関である国府が置かれたとされた政治の中心地だった。京都から北陸方面に抜ける玄関口として人や物資の交流が盛んで、長い歴史の中で独自の文化や産業を育んできた。

その面影は寺社や街並みを巡っても感じられるが、土地の歴史や風土をよく知りたければ、「越前和紙」に触れるといい。8世紀の古文書ですでに品質の高さが褒めたたえられた越前和紙。江戸時代(1603~1868)になると、越前和紙の中でも最高級品とされた「越前奉書」が公家や將軍の公文書に用いられた。のちには紙幣や日本画の用紙としても使われ、越前は現在でも日本有数の和紙生産地として知られる。

和紙づくりの中心地である「五箇地区」には、日本で唯一の紙の神様「川上御前」を祀る「岡太神社・大瀧神社」が立ち、現在も50軒の和紙製造業者が軒を連ね



12



13

12,13/洗練された空間で製品が展示されるタケフナイフビレッジ。輪郭の美しいペーパーナイフはお土産に人気



14



15



16

る。ここでまず足を運びたいのは、「卯立の工芸館」。18世紀頃の建造物を利用した施設で、昔ながらの和紙づくりを見学することができる。原料となる楮の木の皮を煮てやわらかくし、塵をとり、叩いてほぐし、トロロアオイの粘液と混ぜて、漉き槽と呼ばれる水槽の中に入れる。その中に簀桁と呼ばれる木枠を潜らせてすくい上げると、簀に原料が残し、それを剥がして乾かすと和紙になる。冷たい水に手を潜らせ、手際よく簀桁を動かす職人の姿は、古くからこの土地で見られた光景だ。

いっぽう、「柳瀬良三製紙所」では、伝統的な手漉き技術を活かしながら、現代風にアレンジした越前和紙をつくっている。金型を利用して模様をつけたしなやかな風合いの和紙は、包装紙やブックカバーなどに利用されるそうだ。実際に製造工程を体験することもできるので、挑戦してみるといいだろう。

五箇地区の近くには、「タケフナイフビレッジ」がある。700年の歴史を持つ「越前打刃物」の共同工房で、熱気あふれる刃物職人たちの仕事が見られる。職人の繊

14,15/19世紀から創業を続ける「うるしや」の越前そばは16,17/蔵の辻でカフェを営む「884 (HAYASHI) 珈琲」では、和菓子と珈琲のセットが人気



17

細な技術から生み出されるデザイン性の高いペーパーナイフや包丁は、見惚れてしまうほどだ。

お腹がすいたら、名物料理の「越前そば」の店が集まる市の中心部を目指そう。皿に盛ったそばを、おろした大根とつけ汁に入れて食べる名物料理は、香り高いそばに大根の辛味が絡み、クセになる味わいだ。かつて商人が利用した白壁の蔵が建ち並ぶ「蔵の辻」では、古い蔵を改築した趣のある空間で、コーヒーやスイーツをゆったり楽しめる。

長い時をかけて育まれた技が残る越前。古き良き日本のものづくりの情景に出会う旅が待っている。



越前エリア地図

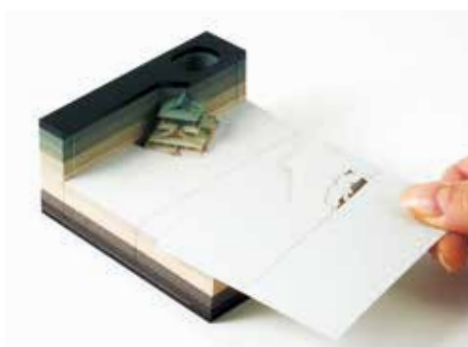
- ①岡太神社・大瀧神社
- ②卯立の工芸館
- ③柳瀬良三製紙所
- ④タケフナイフビレッジ
- ⑤うるしや
- ⑥蔵の辻 (884 (HAYASHI) 珈琲)

●交通案内
東京駅から越前たけふ駅まで北陸新幹線を利用して約3時間。

●問い合わせ
越前市観光協会公式サイト
<https://www.echizen-tourism.jp/>



職場や学校の
机上を和ませる
ユニークな
メモ



上／リンゴや洋ナシをかたどったメモ「KUDAMEMO」。写真提供＝株式会社ドラフト 左下／「本日の会議資料です」という伝言が描かれた付箋「フタマタフセン」は立てて貼れる。写真提供＝キングジム 右下／はがしていくと（左）、城が現れる（右）ブロックメモ「OMOSHIROI BLOCK-Osaka Castle」。写真提供＝株式会社トライアード

思いついたことをさっと書留めたり、誰かにメッセージを伝えたりするときに使う、メモや付箋。デジタルデバイスを使うことが当たり前になった昨今でも、日本の職場や学校では、その活躍の場を失っていない。

使い勝手がいいだけでなく、遊び心を加えられるのも、紙のメモや付箋の面白いところ。たとえば、ピースを切り分けるようにはがせるのが楽しい果物形のメモ。使い続けると紙の断面から彫刻のような

複雑な立体が現れるブロックメモは、時間のうつろいを味わうアートのように。また、かわいいキャラクターが描かれた付箋なら、たとえ書かれた内容が事務的な伝言であっても、受け取った相手の気分を束の間上げてくれるだろう。

やる気を高め、場の雰囲気を和ませるのにも役立つ。ユニークなデザインのメモや付箋は、仕事や勉強に小さな楽しみを与えてくれる名脇役だ。

